

隨筆・提言

やんばるを歩く樂しみ

共同通信社・那覇支局長 藤塚正道

沖縄本島北部の「やんばる」と呼ばれる一帯は自然の宝庫だ。最高峰でも標高五百三メートルの与那覇岳。本部半島は別として、東西の幅は十キロ前後にすぎない。

にもかかわらず、森林、草花、動物、昆虫と豊かな生態系を抱えてわれわれを楽しませてくれる。

そんなやんばるに魅せられて、月に一、二回通うようになつたのは、那覇に着任してから間もない二年前だった。もともと山歩きが好きで、関東では丹沢や奥多摩に遊ぶことが多かつたが、こちらであらためて目を開かれた思いがする。

初めは友人たちと森林に分け入り、無人の浜でゆつたりとした時を過ごした。ベテランガイドが案内する川上りツアーも経験した。ここ一年余りは山歩き同好グループの一員としての活動が主体になつてきた。

つい先日は、東海岸北部の安田川を歩く機会があつた。同好グループの仲間とともに、海岸にほど近い橋のたもとから流れに入り、さかのぼること約六時間。

水辺にはカニやタナガードはいり、岩陰にヒメハブがたたずむ。水面すれすれにクロアゲハやリュウキュウハグロトンボが舞

う。ときには「ひゆるるるる」とアカシヨウビン独立の鳴き声も聞こえる。川の両岸は日陰へゴや薦の密林が続き、よく見ると枝には緑鮮やかな力エルがへばりついていた。

かつて米国でハイキングクラブに所属していたが、印象に残っていることがある。ボランティアによる登山道の整備だ。長大なアパラチアン山地の登山道を分割、一路一ルート。確かに歩きやすいが、ここまで整備する必要があるのかとも思つ。歩きやすいが、一キロほどを分担して、倒木の片付けなどをしていたと記憶する。

自分自身、やんばるとの付き合い方を考えさせられることが多いハイカーのひとりだ。沖縄総合事務局には、林道や砂防ダムなどの開発について、県民や観光客が貴重な自然を末永く楽しめるよう

Muribushi July 2003 20

いだろうか。川の歩行もそうだが、藪こぎも自然に一定の負担をかけている。

ハイカーが大勢で同じ場所を踏み付ければ、確かに草木は痛めつけられる。それは避けなければならぬまい。山歩きの仲間たちは参加者が多い場合、自然に対する影響を軽減するためグループを分けておこなう。それは避けては



そこで、考
え付くのが
「楽しむ自然」と
「守る自然」の
調和だ。

シーズン

中、人々が数
珠つなぎにな
る尾瀬湿原の木道に象徴され
るよう、本土では大量の訪問者から

自然を守るために登山道が整備さ

み入れず、遠くから眺めるだけに
するということになる。しかし、大切なのはほどよい距離感ではな

る。自然保護を徹底すれば、森や川の中に足を踏み跡をたどれば十分ということもあるだろう。自然保護を徹

底すれば、森や川の中に足を踏み跡をたどれば十分ということもあるだろう。自然保護を徹

底すれば、森や川の中に足を踏み跡をたどれば十分ということもあるだろう。自然保護を徹

* * *